「自己」にかかわる心理学的研究の計量書誌学的分析
――わが国の学会誌に掲載された実証論文のタイトル分析：1980 年－2013 年――

里見　香奈*・成田　健一**

抄録：「自己」は心理学的研究において古くから非常に重大なテーマとして扱われてきた。心理学という学問が誕生してから現在に至るまで，自己に関する研究は膨大な数に上るであろう。本研究では，計量書誌学的手法を用いて自己に関する論文を定量的に整理することで，自己研究の潮流を実証的に示すことを目指した。1980 年以降のわが国における 11 の学会誌に掲載された全ての実証論文から自己に関する論文を収集し，論文数の経年変化並びにタイトルに使用される語の出現頻度のそれぞれについて、自己論文全体、対象年齢群別・掲載学会誌別の分析を行った。その結果，対象年齢群別の検討では乳幼児・小学生層を対象とする研究が近年減少し，一方で成人・高齢者層を対象とする研究が増加する傾向が示された。掲載学会誌別の検討では，『心理学研究』に最も多く自己論文が掲載されていた。タイトルにも様々な領域に関する語が見られ，自己が心理学に関連するあらゆる領域で研究されていることが明らかとなった。

キーワード：自己，計量書誌学，論文タイトル

「自己」は心理学的研究において非常に重大なテーマとして古くから取り上げられてきた（Bracken，1995）。心理学という学問が生まれてから現在に至るまで，自己に関する研究は領域を問わず膨大な数に上るだろう。1981 年－1996 年のわずか 16 年間だけに限って，自己概念や自尊感情に関する論文を，心理学研究に関して最も網羅的であるといわれる書誌情報データベース PsycINFO（米国心理学会）で検索すると，なんと 11,000 件以上にもなるという（Bracken, 1995）。

数多の自己研究を体系的に捉えようとする研究はこれまでにいくつもなされてきた。たとえば，榎本（1998, 2008）は心理学研究における自己の位置づけを，19 世紀末の James の自己の二重性（客体としての自己，主体としての自己）に代表される自己論からひも解き，多くの理論的・実証的な自己研究を“自己心理学”として体系化することを試みている。歴史的には，20 世紀初頭以降の客観性を重視する行動主義的主張の隆盛にともない，客観的なデータを収集することが困難である主観的な自己研究はその後次第に漸減していったと言われるが，そもそも主観／客観とはなにかという本質的な問題が横たわっている。加えて，パーソナリティ心理学を体系化した Allport の言うように，われわれが自己を持つことは自明であり，心理学において自己という研究テーマが隅に追いやられることは極めて奇妙であるという指摘も無視できまい。その結果，自己研究が息を吹き返し，量的・質的を問わず多様な自己研究が実証的に行われつつあると指摘されている（榎本，1998）。実際，自己に関する研究は，精神分析学，現象学はもちろん，実証研究に関しては，臨床心理学，パーソナリティ心理学の領域にとどまらず，認知心理学，社会心理学，発達心理学などなど，様々な領域で取り上げられてきている。近年自己は心理学研究の諸領域を繋ぐ役目をもつ概念として再検討されており，実証的自己研究は再び盛んになってきていると言えよう（榎本，2008）。

わが国だけに限ってみても，膨大に生み出される自己研究に関して，戦前からの自己研究の流れが存在するだけでなく（サトウ，2008），近年の学会発表の兆候からも，多様で多くの実証的な自己研究がなされていることがわかる（梶原，2008）。心理学の各領域における自己研究に関わるシリーズの専門書までも刊行されるようになった（榎本・岡田・下斗米，2008-2009）。さらには専門誌において，心理学と近接領域を結びつけ“改めて自己を問う”といった特集も組まれるほどである（遠藤，2014）。

結果として，歴史的にも大変長く，また大量の実証研究が日々生み出されている現状では，一人の研究者がそれら文献の全てを収集，読破しまとめ上げることは不可能と言っても過言ではない。そのため，自己の中でも研究領域・テーマ，方法論，地域，発達段階など，それぞれ何らかの形で限って，一部分を切り取るような形で，実証的な自己研究の一側面を明らかにするという方法をとらざるを得ない。たとえば，自己の中でも「アイデン

*関西学院大学大学院文学研究科博士課程前期課程
**関西学院大学文学部教授

ティティ」に関しては鑪らの一連の研究などはその代表例の1つとなり得るだろう（鑪・宮下・岡本，1998；鑪・宮下・岡本，1999，2002など）。それでは，わが国における自己研究に限るとしても，現在までの自己研究の流れを検討しようとするならば，どのようなことが可能であろうか。

本研究では，こうした膨大な量の研究例を洗い出し定量的に研究動向を探る場合において有用であると考えられている計量書誌学的手法を用いてみたい。計量書誌学とは，著作，文献発表，および文献利用のパターンを研究したり，書誌（著者，タイトル，発行所等の文献情報）が文献を反映しているという前提のもとに，文献の書誌事項を定量的に研究する学問である（Diodato, 1994）。この計量書誌学的手法を用いることによって，特定の研究領域の動向を定量的に知ることが容易になる。

たとえば，高橋・成田（2012）は心理学・医学に関する主要な文献データベースから Internet addiction 研究の書誌情報を収集し，得られたデータを基に計量書誌学的手法を用いて Internet addiction 研究の展開を定量的に示した。彼らは文献収集にあたって，著者が読者に最も簡潔に読者に伝えたい情報が含まれているであろう論文タイトルを分析の対象としている。論文タイトルに出現する語を検討するタイトル分析は，計量書誌学的アプローチの中でも研究動向を探る手法として比較的近年多く用いられるようになっている（Fu, Ho, Sui, & Li, 2010；Ho, Satoh, & Lin, 2010；Li, Ding, Feng, Wang, & Ho, 2009；Xie, Zhang, & Ho, 2008）。

そこで本研究では，実証的自己研究が多様化してきたと考えられる1980年以降に限り，わが国における自己研究の現在に至る約30年の潮流について，計量書誌学的手法を用いて検討する。より具体的には，学会誌に掲載された論文タイトルに注目して自己にかかわる実証的研究論文（以下，実証論文）を収集し，論文の数並びにタイトルに用いられている語を指標として自己研究の動向を示す。詳しくは後述するが，発表年代，対象年齢群，掲載学会誌を中心に自己研究論文（以下，自己論文）数の経年変化を定量的に示すことによって，その潮流の実際を明らかにしたい。

方　　法

収集対象学会誌

わが国における心理学に関する学会誌に掲載された研究論文から，自己概念や自己評価に関わる実証論文（展望論文や書評を除く）を収集することを試みた。心理学的な自己研究は“基礎・全般”“発達”“人格・感情”“臨床”“社会”“応用”の6つの研究トピックに含まれると考え，これらの研究トピックを主として扱っている以下に示す11の学会誌を収集の対象とした。

学会誌の選択は，並川・脇田・野口（2010）が自尊感情尺度を収集・整理した際に参照した学会誌6誌（『心理学研究』，『教育心理学研究』，『発達心理学研究』，『パーソナリティ研究（旧性格心理学研究）』，『社会心理学研究』，『実験社会心理学研究』）を筆頭に，上記6つの研究トピックのいずれかを代表し，かつ質的・量的を問わず実証的自己論文が掲載されやすいと考えた5誌（『青年心理学研究』，『感情心理学研究』，『カウンセリング研究』，『心理臨床学研究』，『応用心理学研究』）を対象とした。

なお本研究においては，収集の対象論文を実証的自己論文に限った。そして，対象年を自己研究が再発見され，実証的自己研究が盛んになってきたと考えられる1980年をスタートとし，そこから2013年までの34年間とした。収集対象となる11誌の刊行年，巻号などをTable 1に示す。

Table 1　収集の対象となった学会誌

主たる研究トピック	学会誌名	巻数	発刊年	収集開始年	収集総年数	実証論文数
基礎・全般	心理学研究	51-85	1926	1980	34	1817
	教育心理学研究	28-61	1953	1980	34	1511
発達	発達心理学研究	1-24	1990	1990	24	555
	青年心理学研究	1-25	1989	1989	25	101
人格・感情	パーソナリティ研究*1	1-22	1993	1993	21	436
	感情心理学研究	1-21	1993	1993	21	177
臨床	心理臨床学研究	1-31	1983	1983	31	1277
	カウンセリング研究	13-46	1968	1980	34	670
社会	実験社会心理学研究*2	20-53	1971	1980	34	534
	社会心理学研究	1-29	1985	1985	29	538
応用	応用心理学研究	3-39	1978	1980	34	295

＊1）『性格心理学研究』は2003年より「パーソナリティ研究」に誌名変更している。
＊2）『実験社会心理学研究』の前身誌は『教育・社会心理学研究』であり，その発刊年は1960年である。したがって，『教育・社会心理学研究』は対象としていない。

Table 2　収集基準となった自己関連語

a）自己，self，セルフ
b）自我，ego，エゴ
c）アイデンティティ，identity
d）接頭語に「自」をもつ単語*…自尊感情・自尊心，自意識・自己意識，自身，自分，自伝，自伝的記憶，自称詞，自他

＊）d）の接頭語に「自」をもつ単語については，自己関連語としてみなしたものと除外したものがある。両者の判断基準については，基本的に単語を英訳した際に「self」が含まれるものを自己関連語としてみなした。

収集対象論文

自己研究は多様であることから使用される語も多様となる。本研究においては，操作的に Table 2 に示した自己関連語を論文のタイトル中に含む論文を自己論文とみなし収集した。なお，タイトルが英文である場合も同様に，タイトル中に自己関連語（self，ego，identity）が含まれるものを収集した。また同一の著者や研究グループが同一のデータを異なった視点から複数回，論文化している場合もあり得るが，本研究では論文としての本数を集計することを優先して重複を許し，特に制限は設けなかった。

収集手続

本研究では Table 1 に示す学会誌に掲載された実証論文すべてに目を通し，上述の収集基準に合致する自己論文を収集することを試みた。収集にあたっては目視による方法とインターネット上の検索による方法の 2 通りを併用した。前者については，収集対象である学会誌すべてを目視で確認した。後者については，学会誌を特定した上で“CiNii Articles”（国立情報学研究所，2014）におけるタイトル検索で自己関連語を検索した。

分析方法

収集した論文から，掲載学会誌，発表年，論文タイトル，対象年齢群の 4 点を切り出して，分析に用いた（なおこの他にも掲載巻号，掲載ページ，著者，自己関連語についても集計している）。

収集した論文データから，自己論文数の経年変化，自己論文におけるタイトルに使用されている語の出現頻度，のそれぞれについて分析を行った。両者とも自己論文全体，対象年齢群別，掲載学会誌別の 3 つの視点で分析した。これらにより，全体の潮流，発達段階別の傾向，そして各学会誌の傾向を，それぞれ明らかにしたい。

自己論文数の経年変化についての分析

自己論文全体　全自己論文数を実証論文数と比較する。年代は 1980 年－2013 年について，1980 年以降 5 年を一区切りとして，7 つの年代区分を設けた（具体的には Table 3 を参照されたい）。ただし，最後の年代は 2010-2013 年の 4 年間となっている（このため合計論文数も少なくなる）。

対象年齢群別　各年齢群を研究対象としている論文の本数を上述の 5 年刻みの年代ごとに示す。

掲載学会誌別　各学会誌に掲載された自己論文の本数を年代ごとに示す。

タイトル語の出現頻度についての分析

自己論文全体　自己論文全体のタイトルに使用されている語（以下“タイトル語”とする）について，テキストマイニングによる形態素分析を行う。具体的には，論文タイトルに使用されている名詞・複合名詞および形容詞を抽出し，これらをタイトル語としてそれぞれの出現頻度を求めた。さらに自己関連語についても検討も行う。

対象年齢群別　対象年齢群ごとに，自己論文全体の分析と同様に自己論文のタイトル語についてテキストマイニングを行い，タイトル語としての出現頻度を検討する。

掲載学会誌別　掲載学会誌ごとに，やはり自己論文全体および対象年齢群別の分析と同様に自己論文のタイトル語についてテキストマイニングを行い，タイトル語としての出現頻度を検討する。

結　　果

自己論文数の経年変化についての分析

自己論文全体　7 つの年代区分それぞれにおける自己論文数と実証論文数を Table 3 に示した。学会誌 11 誌の 34 年間における実証論文数は総計 7,911 件となった（Table 3 最下段参照）。このうち自己論文は 1,016 件であり，全体の約 1/8 となった。

自己論文数の経年変化については，80 年代後半において，実証論文の増加率に比べて（前年代区分比 1.3 倍），著しい増加率を示した（前年代区分比 2.4 倍）。この 80 年代後半の自己論文のタイトル並びに掲載学会誌を見ると，これまで以上に実験的な自己論文が増加していた。しかしながら，全体的に見れば実証論文と自己論文の経年変化は概ね同じ傾向で増加し続けていた。

対象年齢群別　Table 3 中段に対象年齢群ごとに論文数の経年変化を示した。全自己論文の中で，大学生を対象とする研究が 51.5% から 68.0% と，発表年代を問わず最も多かった。一方，乳幼児・小学生を対象とする研究は，80 年代前半においてのみ当該年の自己論文の中で 39.4% を占めていたが，それをピークに近年減少傾向にあり，ここ数年間はわずか 9.0% となっている。また，中高生を対象とする研究は，80 年代後半の 39.2%

Table 3 自己論文数の経年変化

		発表年代							
		1980-1984	1985-1989	1990-1994	1995-1999	2000-2004	2005-2009	2010-2013	合計
掲載学会誌*1	心理学研究	11(33.3%)	26(32.9%)	32(26.7%)	39(22.3%)	28(16.0%)	44(17.2%)	30(16.9%)	210(20.7%)
	教育心理学研究	18(54.5%)	25(31.6%)	31(25.8%)	49(28.0%)	33(18.9%)	30(11.7%)	15 (8.4%)	201(19.8%)
	パーソナリティ研究	–	–	1 (0.8%)	13 (7.4%)	17 (9.7%)	53(20.7%)	37(20.8%)	121(11.9%)
対象年齢群*2	乳幼児・小学生	13(39.4%)	18(22.8%)	24(20.0%)	25(14.3%)	22(12.6%)	20 (7.8%)	16 (9.0%)	138(13.6%)
	中高生	11(33.3%)	31(39.2%)	31(25.8%)	37(21.1%)	43(24.6%)	57(22.3%)	29(16.3%)	239(23.5%)
	大学生	17(51.5%)	41(51.9%)	73(60.8%)	119(68.0%)	116(66.3%)	169(66.0%)	118(66.3%)	653(64.3%)
	成人・高齢者	2 (6.1%)	10(12.7%)	13(10.8%)	24(13.7%)	31(17.7%)	43(16.8%)	24(13.5%)	147(14.5%)
	その他*3	1 (3.0%)	1 (1.3%)	1 (0.8%)	5 (2.9%)	5 (2.9%)	3 (1.2%)	10 (5.6%)	26 (2.6%)
自己論文数		33 (100%)	79 (100%)	120 (100%)	175 (100%)	175 (100%)	256 (100%)	178 (100%)	1016(100%)
実証論文数		614	772	1046	1227	1306	1638	1308	7911

*1, *2）括弧内の母数は当該年代における自己論文数（なお対象年齢群については，複数の発達段階を対象としている論文は重複して収集されているため割合（%）の合計は 100% を超える）

をピークに，90 年代以降は 20% 前半を中心に横ばいとなっている。このように自己論文の対象は時代を問わず一貫して大学生が多く，乳幼児・小学生並びに中高生における自己論文は相対的に減少している（2010 年代ではそれぞれ 9.0%，16.3%）。これに対し，成人・高齢者を対象とする研究は徐々に増加してきており，80 年代前半ではわずか 6.1% であったが，2010 年代前半では 13.5% と若年層を対象とする研究数とは逆の結果となっている。

掲載学会誌別 Table 3 上段に全自己論文の中で 5 割以上を占める『心理学研究』,『教育心理学研究』,『パーソナリティ研究』の 3 誌について論文の本数の経年変化を示した。『心理学研究』は全自己論文数の 20.7% を占めており，自己論文が最も多く掲載されていた。年代ごとに見てみると，2000 年代後半の 44 件をピークに迎え，近年は概ね増加傾向にある。次に，『教育心理学研究』は全自己論文数の 19.8% を占めていた。80 年代から 90 年代にかけては増加傾向にあったが，90 年代後半の 49 件をピークに，近年は減少傾向にある。また，『パーソナリティ研究』は全自己論文数の 11.9% を占めていた。90 年代の発刊時から増加傾向にあり，とりわけ 2000 年代後半では 53 件と数が急増している。

タイトル語の出現頻度

自己論文全体 自己論文全体において論文タイトルのテキストマイニングによる形態素分析を行った。Table 4 に上位 50 位までのタイトル語を示す。「青年｜期（63 件)」や「大学生（49 件)」という語が上位に挙がっていることから，自己研究は青年期後期において最も盛んであることがタイトルにも表れている。また，「発達（28 件)」が見られることから，自己の発達的な検討が相対的に多くなされている。

次に，自己関連語について見てみると，自己研究には「自己（78 件)」「アイデンティティ（26 件)」「自我（6 件)」の順でこれらの言葉が用いられる傾向にあることが分かった。「自我」は単独で使用されることは少ない一方で，「自我｜同一性（19 件)」は比較的多く見られた。接頭語に「自」をもつ単語としてよく見られたのは，「自尊｜感情（39 件)」「自尊心（24 件)」「自分（15 件)」などであった。

対象年齢群別 対象年齢群ごとに論文タイトルのテキストマイニングによる形態素分析を行った。Table 5 に対象年齢群ごとの上位 20 位までのタイトル語を示す。どの年齢群においても，「自己｜評価」「自尊｜感情」「自己｜概念」の 3 語が上位 20 位以内に現れていた。また，対象年齢群ごとに見てみると，乳幼児・小学生では「子ども（9 件)」や「母親（7 件)」の単語が見られることから，改めて指摘するまでもないことかもしれないが，母子関係の中でとらえられる傾向が高い。中高生においては，「生徒（10 件)」や「教師（8 件)」の単語から学校場面，さらに「友人｜関係（8 件)」が重要視されている。大学生では，「自己｜開示」や「アイデンティティ」など，他者とのかかわりの中での自身の言動や位置づけに関する単語が多く見られた。また，「対人｜不安（11 件)」や「うつ（11 件)」など，心理臨床的問題に関与する単語が見られる点も大学生を対象とする研究の特徴であった。成人・高齢者においては，「母親（10 件)」「親（6 件)」「幼児（5 件)」などの単語から，親としての自己に注目する研究が多く見られた。この点は乳幼児・小学生の結果と対応している。さらに，「高

Table 4　自己論文のタイトルに使用されるタイトル語数

順位（n＝1016）		論文数	順位		論文数	順位		論文数
1	○自己	78	*21*	中学生	19	*41*	子ども	11
2	青年｜期	63	*22*	○自己｜意識	17	*42*	精神｜的｜健康	11
3	大学生	49	*23*	○理想｜自己	17	*43*	尺度	11
4	○自己｜評価	40	*24*	変化	17	*44*	信頼｜性	11
5	○自尊｜感情	39	*25*	○自己｜受容	16	*45*	○自己｜効力	11
6	○自己｜開示	33	*26*	○自己｜認知	16	*46*	○自己｜価値	10
7	他者	32	*27*	動機	15	*47*	ネガティブ	10
8	幼児	31	*28*	○自己｜効力｜感	15	*48*	○自己｜評定	10
9	うつ	31	*29*	○自分	15	*49*	○セルフ	10
10	発達	28	*30*	○自己｜愛	14	*50*	課題	9
11	アイデンティティ	26	*31*	母親	14	⋮		
12	○自尊心	24	*32*	発達｜的｜変化	14	*105*	○自我	6
13	○自己｜概念	23	*33*	○自己｜像	14			
14	認知	23	*34*	開示｜者	13			
15	○自己｜愛｜傾向	22	*35*	役割	13			
16	児童	22	*36*	妥当｜性	12			
17	青年	21	*37*	親	12			
18	高校生	20	*38*	事例	11			
19	○自我｜同一｜性	19	*39*	生徒	11			
20	友人｜関係	19	*40*	対人｜不安	11			

＊1）複合名詞は「｜」によって個々の名詞に分割して示した。
＊2）自己関連語には○印をつけて示した。

Table 5　各発達段階を研究対象とする自己論文のタイトルに使用されるタイトル語数

順位	乳幼児･小学生（n＝142）	論文数	中高生（n＝182）	論文数	大学生（n＝661）	論文数	成人･高齢者（n＝151）	論文数
1	**幼児**	**29**	**青年｜期**	**32**	**青年｜期**	**54**	**○自己**	**13**
2	児童	20	高校生	19	**○自己**	**53**	**母親**	**10**
3	**発達**	**16**	中学生	19	大学生	48	**○自尊｜感情**	9
4	**○自己**	**14**	**発達｜的｜変化**	**11**	**○自己｜開示**	24	**○自己｜評価**	8
5	**○自己｜評価**	13	**生徒**	**10**	**○自尊｜感情**	20	高齢｜者	6
6	**子ども**	**9**	**教師**	**8**	**○自己｜評価**	20	親	6
7	**他者**	**7**	**友人｜関係**	**8**	○自尊心	20	**発達**	**6**
8	**母親**	**7**	他者	7	○アイデンティティ	**19**	成人｜期	6
9	○自分	6	**○自尊｜感情**	7	**他者**	**18**	**○アイデンティティ**	**6**
10	児童｜期	6	**○自己｜評価**	7	青年	18	事例	5
11	**認知**	**6**	○自我｜発達｜上	6	**○自己｜概念**	17	○自己｜愛	5
12	**○自尊｜感情**	6	**○自己｜開示**	**6**	**○自己｜愛｜傾向**	**16**	**幼児**	**5**
13	理解	6	**○自己｜価値**	**6**	○理想｜自己	15	**○自己｜概念**	5
14	**○自己｜価値**	**5**	**○自己｜概念**	6	**○自己｜受容**	**14**	中年｜期	5
15	**発達｜的｜変化**	**5**	**○自己｜受容**	**5**	**○自我｜同一｜性**	**14**	**○自我｜同一｜性**	**5**
16	社会｜的｜行動	5	動機	5	**友人｜関係**	**13**	**青年｜期**	**4**
17	○自己｜統制	5	**○自己｜愛｜傾向**	**5**	開示｜者	13	女性	4
18	**○自己｜意識**	**5**	**○文化｜的｜自己｜観**	**5**	**認知**	**13**	○自己｜像	4
19	学習	4	**認知**	**5**	○自己｜効力｜感	12	○自己｜評定	3
20	**○自己｜概念**	4	**○自己｜意識**	**5**	対人｜不安	11	○自己｜理解	3
	役割	4			妥当｜性	11	**教師**	**3**
	○自己｜認知	4			うつ	11	社会｜的｜比較	3
	○自己｜主張	4					○自我｜機能	3
	発達｜的｜検討	**4**					**発達｜的｜検討**	**3**
							生徒	**3**
							○自己｜開示	**3**
							中学校｜教師	3
							子	3
							中高年｜期	3
							○文化｜的｜自己｜観	**3**
							子ども	**3**

＊1）複合名詞は「｜」によって個々の名詞に分割して示した。
＊2）複数の発達段階に共通したタイトル語はゴシック体で示し，全ての発達段階に共通したタイトル語はゴシック体＋下線で示した。
＊3）自己関連語には○印をつけて示した。

Table 6 主要学会誌における自己論文のタイトルに使用されるタイトル語数

順位	心理学研究（n＝210）	論文数	教育心理学研究（n＝201）	論文数	性格心理学研究／パーソナリティ研究（n＝121）	論文数
1	○自己	20	青年｜期	19	うつ	13
2	○自己｜評価	13	幼児	15	大学生	8
3	うつ	9	発達	13	○自己｜愛｜傾向	7
4	○理想｜自己	8	○自己｜評価	13	友人｜関係	7
5	青年｜期	7	○自己	13	○自己	7
6	他者	6	大学生	13	青年｜期	6
7	○自伝｜的｜記憶	6	○自尊｜感情	11	○自尊心	6
8	○自己｜開示	6	○自我｜同一｜性	11	対人｜不安	6
9	大学生	6	児童	10	○自己｜価値	5
10	○自尊｜感情	5	認知	8	動機	5
	○自己｜概念	5			妥当｜性	5
	○セルフ	5				
	性格｜特性	5				
	○自他	5				
	認知	5				
	判断	5				

＊1）複合名詞は「｜」によって個々の名詞に分割して示した。
＊2）自己関連語には○印をつけて示した。

齢｜者（6 件）」の単語が第 5 位に挙がっていることから，高齢者の自己研究も研究テーマとして扱われやすくなる可能性を秘めている。

掲載学会誌別 掲載自己論文数が最も多かった『心理学研究』，『教育心理学研究』，『パーソナリティ研究』の 3 誌について，論文タイトルのテキストマイニングによる形態素分析を行った。Table 6 に掲載学会誌ごとの上位 10 位までのタイトル語を示す。『心理学研究』では，「自伝｜的｜記憶（6 件）」や「認知（5 件）」などの認知に関する単語，「理想｜自己（8 件）」や「自尊｜感情（5 件）」などのパーソナリティに関する単語といったように，さまざまな領域の単語が現れていた。『教育心理学研究』では，「青年｜期（19 件）」「幼児（15 件）」「児童（10 件）」の単語が見られ，幼児期から青年期の若年層において自己研究がさかんである。また，『パーソナリティ研究』では，「うつ（13 件）」や「対人｜不安（6 件）」といった心理臨床，不適応に関わる単語と，「自尊心（6 件）」といった適応に関わる単語のどちらも見られていた。

考　　察

ここでは，自己論文数の経年変化，並びにタイトル語の出現頻度という 2 つの分析を込みにして，自己論文全体，対象年齢群別，掲載学会誌別の 3 つの視点で考察を進めたい。

自己論文全体

自己論文は 34 年間で総計 1,016 件となったが，この値の大小を判断するためには，例えば“発達”という語について全く同様の分析を行い，比較対照群を設定する必要があるだろう。これを本研究と同様の手続きで行うことは極めて困難であるため，ここでは米国心理学会が作成している心理学に関する書誌データベース PsycINFO を用いて，日本語論文においていくつかの心理学用語を検索して得られた論文の数を集計し，比較することを試みた。

まず本研究と同じ 1980 年－2013 年における日本語論文において，タイトル中に“self*,”“identity*,”“ego*”のいずれかを含む論文は 701 本であった。これに対して同じ 34 年間における日本語論文でタイトル中の語幹に“develop*,”“behavi*,”“social*,”を持つ論文を検索したところ，それぞれ，735 本，654 本，468 本となった。もちろん厳密には本研究で収集対象となった学会誌と PsycINFO に収録されている学術誌は一致していないので，論文数も 1,016 本（本研究）と 701 本（PsycINFO）と一致しない。しかしこの結果から考えると，わが国の学術誌において“発達”，“行動”，“社会”などの用語がどの程度利用されているのかが見えてくるだろう。これらのことを総合して考えるならば，わが国の学会誌に掲載された過去約 30 年の実証論文のうち約 1/8 を占めることとなった自己論文研究は，全心理学研究の中でも注目度が比較的高い領域であると言えよう。すなわち自己はわが国の心理学研究の中でも極めて注目されやすく，実証的な研究が行われている概念である。このことが，学会誌に掲載された論文数から定量的に示されたと言えよう。

自己論文数の経年変化について，80 年代後半で，実証論文に比べ自己論文の増加率が著しく高くなってい

た。欧米で見られた自己研究の再興の動きが，80 年代後半のわが国においても実験的研究の増加など多様な領域で花開き，自己研究が心理学研究の諸領域を繋いでいるのかもしれない。

対象年齢群別

対象年齢群別に検討した場合，いずれの発達段階を対象とする研究でも，“自己評価”“自尊”“自己概念”など自分自身に対する評価・イメージに関わる研究は多い。つまり年齢群にかかわらず，“自己評価”や“自己概念”が常に問題として設定される最も一般性が高い研究テーマであるとも言えるだろう。

特定の対象年齢群に関して見ると，大学生を対象とする自己論文が発表年代を問わず最も多かった。一方で，乳幼児・小学生を対象とする自己論文は 80 年代以降減少傾向にあった。近年の高齢者人口の増加は，高齢者への関心を高め，自己論文においても同様に，成人・高齢者に関わる心理学的研究が増加している。このため，相対的に幼児・児童など若年層を対象とする研究数も減少しているのであろう。したがって，成人・高齢者を対象とした研究と若年層を対象とした研究の差は，今後ますます広がっていく可能性をもっている。

また，大学生を対象とする研究におけるタイトル語の検討では，「自己｜開示」「アイデンティティ」「自我｜同一｜性」あるいは「対人｜不安」といった自己と他者に関わる語がよく使用されていた。青年期における対人関係の広がりは，自他の違いの認識を拡大させ，自己に関わる関心がより高まるといった，まさに青年心理学的な研究テーマが根強く扱われていると考えられるだろう。

掲載学会誌別

掲載学会誌ごとの検討では，『心理学研究』が最も多く自己論文を掲載していた。『心理学研究』は，心理学に関わる学会誌として最も幅広い領域を扱い，また掲載論文数も多いため，当然の結果と言えよう。そのタイトル語を見てみると，「自己｜評価」「うつ」「他者」「自伝｜的｜記憶」「認知」など，様々な分野・領域に関する語が見られた。言うまでもなく『心理学研究』において自己があらゆる心理学領域で研究されていることの証左となるだろう。

『教育心理学研究』は『心理学研究』に次いで自己論文を多く掲載していた。『教育心理学研究』は『心理学研究』に次いで“教育”のみならず多くの領域を扱い，『心理学研究』以外の他学会誌に比べ年間の掲載論文数も多い。このため，これも当然の結果と考えられる。ただし，その数は近年減少傾向にあった。これは 1990 年代に刊行された『発達心理学会』や『パーソナリティ研究』など専門学会の出版する他学会誌の影響およびそれに関連して『教育心理学研究』が“教育”により特化した論文を掲載する傾向にあることも影響しているであろう。『教育心理学研究』のタイトル語を見てみると，「青年｜期」「幼児」の語が最も多く使用されていた。発達的な関心から自己論文が執筆されていたと言えよう。すなわち上述の対象年齢群別の検討で若年層を対象とする論文数が減少していることと『教育心理学研究』に掲載された論文が減少傾向にあることとは，軌を一にしている。つまり，各種新学会誌の刊行並びにそれに伴う『教育心理学研究』の性質の変化に加え，幼児・児童を対象とした発達的自己研究に関する関心の低下が，近年の減少傾向の原因として推測されよう。

『パーソナリティ研究』には 2005 年以降現在まで，全学会誌の中で最も多くの自己論文が掲載されている。タイトル語を見ると，青年期・大学生を中心として，対人関係や適応に関わるアナログ研究なども含み自己の個人差に関する研究の多くが『パーソナリティ研究』に掲載されているのであろう。おそらくは今後も自己論文が一定数を占めるであろう。

以上に示したように，本研究は自己論文の多様性をその論文数や，タイトルに用いられている用語の点から検討を行ったに過ぎない。本研究は記述的な側面を重視して，主として数という点から自己に関わる研究の再構築を試みたが必ずしも十分なものとは言えない。人を惹きつけてやまない問である“自己とは何か”には答えることがまだまだできない。もちろん，本研究での検索結果はより実り豊かなさらに多くの情報を含んでいる。本研究の結果をさらに発展させるべく，今後の研究の進展を期待したい。

引用文献

Diodato, V.（1994）. Dictionary of bibliometrics. New York : The Haworth Press.（ディオダート，V. 芳鐘冬樹・岸田和明・小野寺夏生（訳）（2008）. 計量書誌学辞典　日本図書館協会）

Bruce A. Bracken（1995）. Handbook of Self-Concept : *Developmental, Social, and Clinical Considerations*（*Wiley Series on Personality Processes*）New York : Wiley.（ブルース・A. ブラッケン　梶田叡一・浅田匡（翻訳）（2009）. 自己概念ハンドブック－発達心理学，社会心理学，臨床心理学からのアプローチ　金子書房）

遠藤由美（編）（2014）. 特集：改めて自己を問う――心理学と近接領域の饗宴――. 心理学評論，**57**, 277-451.

榎本博明（1998）.「自己」の心理学－自分探しへの誘い　サイエンス社

榎本博明（2008）．自己心理学の位置づけと可能性　榎本博明・岡田努（編）自己心理学 1　自己心理学研究の歴史と方法（pp.1-21）金子書房

榎本博明・岡田努・下斗米淳（監修）（2008-2009）．自己心理学（全 6 巻）金子書房

Fu, H., Ho, Y., Sui, Y. & Li Z.（2010）. A bibliometric analysis of solid waste research during the period 1993-2008. *Waste Management,* **30**, 2410-2417.

Ho, Y., Satoh, H. & Lin S.（2010）. Japanese lung cancer research trends and performance in science citation index. *Internal Medicine,* **49**, 2219-2228.

梶原佳子（2008）．最近の学会活動にみる自己心理学研究の流れ　榎本博明・岡田努（編）自己心理学 1　自己心理学研究の歴史と方法（pp.33-47）金子書房

国立情報学研究所．（2014）．CiNii Articles. －日本の論文をさがす－　国立情報学研究所．Retrieved from http : //ci.nii.ac.jp/（January 21, 2016）

Li, L., Ding, G., Feng, N., Wang, M. & Ho, Y.（2009）. Global stem cell research trend : Bibliometric analysis as a tool for mapping of trends from 1991 to 2006. *Scientometrics,* **80**, 39-58.

並川努・脇田貴文・野口裕之（2010）．日本における自尊感情尺度使用の状況と課題．教育心理学フォーラムレポート，FR-2010-01.

サトウタツヤ（2008）．昭和戦前期までの日本の心理学における自己・自我研究　榎本博明・岡田努（編）．自己心理学 1　自己心理学研究の歴史と方法（pp.22-32）金子書房

高橋伸彰・成田健一（2012）．Internet Addiction に関する研究の展開：計量書誌学的手法を用いて．人文論究，**62**, 151-170.

鑪幹八郎・宮下一博・岡本祐子（1998）．アイデンティティ研究の展望Ⅴ-1　ナカニシヤ出版

鑪幹八郎・岡本祐子・宮下一博（1999）．アイデンティティ研究の展望Ⅴ-2　ナカニシヤ出版

鑪幹八郎・岡本祐子・宮下一博（2002）．アイデンティティ研究の展望Ⅵ　ナカニシヤ出版

Xie, S., Zhang, J. & Ho, Y.（2008）. Assessment of world aerosol research trends by bibliometric analysis. *Scientometrics,* **77**, 113-130.